研究主題　「地域の教育力を生かした豊かな心の育成」

～家庭や地域との継続的な連携・協働を通して～

提言者：杵島郡副校長・教頭会　白石町立白石小学校　江頭　良

１　主題設定の理由

グローバル化、情報化、少子高齢化など、急速に変化する今の社会において、子どもたちには持続可能な社会の担い手として未来をたくましく生きる力が求められている。そのため、学校では、子どもたちが社会で自立し、他者と連携・協働しながら地域の課題解決を主体的に担う力を身に付けられるように、個々の課題や社会の多様な課題に対応した教育活動を展開し、子どもたち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を育成していくことが重要となる。

杵島地区は、白石町（小学校８校、中学校１校）、江北町（小学校１校、中学校１校）、大町町（義務教育学校１校）の12校で構成されている。白石町の中学校は、令和６年度４月から統合して１校となり、令和８年度には、白石町有明地区の小学校統合も予定されている。地区内の全ての学校が学校運営協議会を設置しており、学校・家庭・地域が連携し、地域の力を生かした取組や体験活動を行っている。しかし、各学校には地域連携の課題があり、副校長・教頭の果たす役割は非常に重要である。

そこで、本研究の主題である「豊かな心の育成」を「持続可能な社会の担い手として地域や社会のために考えることができる児童生徒の育成」と定義し、社会に主体的に関わろうとする子どもたちの育成を目指した継続可能な地域連携の在り方を副校長・教頭として探求していきたいと考え、この研究主題を設定した。

２　研究のねらい

子どもたちの社会参画意識の向上を目指して、学校・家庭・地域の参画と協働による継続的な地域連携を推進するための副校長・教頭としてのかかわりを明確にする。

３　研究の経過（計画）

(1)　１年次（令和５年度）

・児童生徒及び教職員の意識調査

・研究の視点の決定

(2)　２年次（令和６年度）

・１年次に確認した課題に対する改善及び交流

(3)　３年次（令和７年度）

・中学校校区ごとの実践

・小中連携

・まとめ

４　研究の概要

(1)　児童生徒の意識調査と現状の確認

令和５年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙で「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思うか」の質問に対し考察を行った。

【表１】令和５年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思うか」

校種	番号	学校	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない	令和4年度比較
小	1	A	31.6	52.6	15.8	0.0	↑
小	2	B	19.0	42.9	20.8	9.5	↑
小	3	C	55.0	40.0	5.0	0.0	↑
小	4	D	38.9	50.0	5.6	5.6	↑
小	5	E	46.7	40.0	13.3	0.0	↑
小	6	F	60.0	30.0	3.3	6.7	↑
小	7	G	38.1	47.6	14.3	0.0	↑
小	8	H	34.8	39.1	19.6	6.5	↑
小	9	I	23.5	50.0	18.4	8.2	↑
小	10	J	26.4	50.9	20.8	1.9	↑
小		県	34.4	44.5	16.2	4.7	
小		全国	33.2	43.6	17.1	5.9	
中	11	K	22.2	56.8	18.9	1.2	↑
中	12	L	13.3	53.3	22.3	8.4	↑
中	13	M	20.0	48.6	31.4	0.0	↑
中		県	23.3	45.8	22.3	8.4	
中		全国	19.6	44.3	24.8	11.1	

令和４年度全国学習状況調査の児童生徒質問紙「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるか」と質問の内容が変わり、単純には比較はできないが、13校ともに令和４年度と比較して「当てはまる」「どちらかといえば当ては

まる」の割合が上がっている。令和５年度この項目で全国平均と県平均を共に上回っている学校は、小学校５校、中学校１校であった。地域の実情や校種の違いはあるが、「地域への貢献活動の推進」と「持続可能な地域連携活動の整理」を視点として、子どもたちが地域のために活動する場と機会を保障し、その活動を価値づけることで、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と思う意識が高まったと考えられる。大幅に数値が上がった学校については、副校長・教頭が地域連携年間計画と地域人材活用計画書を作成し職員に示したこと、担任が地域連携の活動後の振り返りと地域への発信を丁寧に行ったことを要因としてあげることができる。

(2)　教職員の意識調査

令和５年２月に杵島郡の小・中学校教職員に意識調査を行った。「子どもの主体性を高めるよう工夫をし、取り組めたか」「子どもに付けたい資質・能力を意識して取り組めたか」の質問に対しては、ともに98％の教職員が「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した。地域の実情や校種の違いはあるが地域連携を通して子どもの主体性を高めるため、ねらいをもって取り組もうとする教職員の意識は高いと言える。しかし、「子どもたちの地域貢献の意欲を高めるよう工夫をし、取り組めたか」の質問に対しては71％の教職員が「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答し、「教師自身が主体的に地域の方と連携(ねらいを伝える等)に取り組んだか」に対しては65％の教職員が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。また、「地域人材･資源の活用を意識して取り組んだか」の質問に対しては66％の教職員が「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した。子どもたちの社会参画意識の向上を目指す上で、教師の地域貢献の意欲を高める工夫が課題であると言える。

(3)　課題及び視点設定の理由

研究の課題

学校・家庭・地域の参画と協働による継続的な地域連携を進めていくには、副校長・教頭としてどのような手立てをとればよいか。

研究の視点

視点１　　地域連携・体験活動のシステムの構築を図り教育課程に有機的に位置づける。

視点２　　活動の意義や地域連携のよさを共有する手立てを取り入れる。

持続可能な地域連携を推進するため、副校長・教頭としてどのような取組が必要か求められる。杵島地区の児童生徒の地域社会への貢献について意識を調べるため、令和５年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるか。」考察を行ったところ、学習の中で、地域の人とのかかわりを大切にしたり、学習したことを地域へ発信したりするなど交流活動の意義を明確にしてきた学校の数値が高いことが分かった。しかし、コロナ禍の終息後、職員の地域との連携方法について不安感や多忙感が多く、副校長・教頭は常に地域の窓口となり、教育課程に位置付けるために、常に職員に声を掛けていくことが求められている。また、児童生徒の参画意識が希薄化していく、地域が孤立感を感じていることが大きな課題と言える。そこで２年次である今年度は、「地域連携と体験活動のシステムの構築」「活動の意義や地域連携の価値を共有する手立ての導入」を研究の視点として取り入れ、１年次に確認した課題に対する改善及び情報交流を杵島郡副校長・教頭会全員で進める。児童生徒が地域と無理なく双方向に感謝したり、参画したりするようマネジメントすることが持続可能な連携活動につながっていくと考え、このことが副校長・教頭としての業務改善にも寄与し、地域・学校全体の発展につながると考える。

(4)　視点１における実践

地域連携・体験活動のシステムの構築を図り教育課程に有機的に位置づける。

①　コミュニティースクール・地域連携年間計表の作成・学校間での共有

②　カリキュラム・マネジメント検討委員会の実施

(5)　視点２における実践

活動の意義や地域連携のよさを共有する手立てを取り入れる。

①　地域人材GT活用計画書の作成・共有

②　活動の見える化の推進

※白石中学校は、新設校であることを勘案し、システム構築を主として今年度は実践していく。

(6)　各校における実践紹介

①須古小学校

須古小は、学校全体でどのような行事が行われ、どのような地域団体と連携しているのかが一目でわかるようにした「地域連携年間計画表」を作成している。「地域連携年間計画表」を年度変わりに引き継ぐことにより、担任は年間の行事と連携する地域団体を明確に見通すことができ、いつ、誰が、どのように連絡をとるのか等も教頭と確認をとることできる。

須古小学校運営協議会は、16名の委員で構成しており、年３回の会合を実施している。第１回の学校運営協議会において教頭がコーディネートし、「地域連携年間計画表」の確認と前年度の活動の様子と成果を伝え、カリキュラムを検討している。それにより、活動を重ねるごとに学校と地域の代表者とつながりが増し、各学年と地域団体の連絡もスムーズになり、担任や教頭の負担が少なくなると考える。さらに、年度末には、修正すべき箇所の色を変えて書き込み、引き継ぐことで、「地域連携年間計画表」を中心とした運用、改善を重ね、今後の参考となるようにしている。また、活動をしただけに終わることのないよう、常に充実したものにするために、活動の目的と役割をカリキュラムの検討時に地域団体と確認する必要があると考える。

月／団体	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
区長会	3年 須古の町調べ（川津）						6年 しめ縄作り
公民館長会	3年 須古の町調べ（川津）						6年 しめ縄作り
地域婦人部				6年 白石音頭			
老人会		1・2年 セタ飾り作り 交流会					6年 しめ縄作り
地域づくり協議会 こども部会	4～6年 「子どものための絵日」実行委員募集	「子どものための絵日」実行委員募集					
JA・青年部	5年 苗代準備(安武)田植え・管理				5年 稲刈り	5年 須古寿司作り	
PTA	1年 1年給食試食会		全校 親子除草作業 資源物回収			全校 須古まつり	教育講演会
町機関				4年 福祉の学び教室（社協）		4年 須古城探訪	4年 親子料理教室
地域ボランティア	3年 全校 縫ノ池保存会 読み聞かせ（親と子の読書会、やよい）					全校 (須古まつり)親と子の読書会	
CS コーディネーター（学校）	・縫ノ池保存会 ・JA, JA青年部 ・安武さん ・親と子の読書会 ・やよい会	・老人会 ・JA ・KDDI・NTT	・PTA	・社協	・JA, JA青年部 ・安武さん ・佐賀農高	・唐山神社 ・JA青年部 ・PTA ・須古歴史観光振興会 ・親と子の読書会	・老人会 ・区長会 ・公民館長会 ・町会改 ・PTA

【資料1】地域連携年間計画表の一部

また、活動の様子とよさをPTA広報誌や学校だよりなどで地域、PTA、児童と共有している。地域全体に知らせることで、活動自体が地域団体や児童が活躍する場となり、児童や保護者に大変興味ある活動となる。児童や保護者にとっては６年間の見通しと地域の団体とのかかわりをもつことのきっかけであり、地域団体としては継続した活動の成果となり持続可能な地域連携につながっていくと考える。

②北明小学校

北明小には、学校・家庭・地域が連携し、児童の体験活動を協働して進めていく「５STAR　かがやきプロジェクト」という仕組み（システム）がある。【資料２】のように、児童の学びを支える要素を地域貢献、学習支援、安全確保、体験学習、特殊な学習の５つに分けた組織を作り、役割と内容を明確にしている。学校運営協議会委員とPTA役員、保護者、そして地域の人々がそれぞれの役割を意識しながら学校教育に関わっていく。学校運営協議会委員とPTA役員は、それぞれの要素の代表者を決め、活動の実践に向けて学校とも情報交換をしながら動いている。年３回開催する学校運営協議会では、５つのグループに分かれて、どのように活動を進めていくか、改善点はないか等を話し合う時間を設けている。

このように、家庭・地域の組織が学校からの依頼を受けるだけでなく、自主的により良い学校づくりに参画できる仕組があるので、学校の負担も減り、取組を持続させていくことができている。

【資料２】学校運営協議会の組織図

また、各学年で様々な体験活動を仕組んでいる（【写真１】、【写真２】）。例えば、５年生の「稲刈り」の体験活動には、学校運営協議会委員、PTA役員、JA職員、５年生の保護者、用務員、地域の方々などが集う。児童が体験活動をする前に、準備の段階から協力をしてもらっている。立場や年代の異なる人々と児童が集まり、声を掛け合い

知り合うことで活動を支え、力強く盛り上げてくれる。家庭と地域が一体となって、学校の活動に取り組んでくれている。このような大人たちの中で育つ児童には、「お世話になった方々に感謝の会を開きたい」という気持ちが芽生えている。児童は、自分たちの活動を支えてくれた他者の存在に気付き、社会とのつながりを実感することで、社会参画意識を高めている。

今後は、各方面への連絡調整を担任がスムーズに行っていくことができるシステムづくりをさらに進めていきたいと考えている。

【写真１】４年 干潟体験

【写真２】５年 田植え

③白石中学校

白石中は、今年度３校（福富・有明・白石）が統合し、新設白石中学校として新たなスタートを切った。統合により、生徒数、職員数が増大した。また、これまでの校区が広くなったことで、地域とのかかわりが少なくなるのではないかとの心配する意見が、PTAや学校運営協議会の話の中で出てきた。そこで、PTAでは、統合を機会に組織の編成や活動内容の見直しを行ってきた。その中で、課題として挙げられたのが、「３つの地域がこれまで以上に連携を取りながら学校と関わっていくためにはどのようにしていくべきか。」「PTA活動の目的は何か。学校の主役である子どもたちの気持ちや考えを聞いて、一緒になって考えていく必要はないのか。」ということであった。

そこで、第１段階として、生徒会本部役員とPTA本部役員で、統合を機に地域の垣根を越えて、子どもたちと大人で何か行事的なことができないかというテーマのもと話し合った【写真３】。話合いでは、まず父親委員と生徒会本部で「白石中学校始まりの年に記念に残るもの」「これから先伝統として残るもの」を視点にそれぞれでアイデアを出し合った。次に、母親委員会と生徒会本部で「卒業式に向けて何か記念に残るものが作れないか。」を視点にそれぞれアイデアを出し合った【写真４】。そして最後に、この取組を成功させるために、プロジェクト名を決めて、第１回目の話合いを終了した。今後は、話合いを引き続き重ね、プロジェクトの成功に向けて委員を中心に活動を進めていく。

今後の課題として、プロジェクトに取り組んでいく過程で、内容によっては、生徒や保護者だけでなく地域の方々や学校運営協議会の委員の皆様にも協力をしていただきながら進めていくことになる。そのときに、誰がどのような形で中心となって進めていくのか、その過程が、果たして継続可能かについて吟味していく必要がある。

【写真３】生徒会本部と父親委員会との話合い

【写真４】生徒会本部と母親委員会との話合い

(7) 成果

○持続可能な地域連携の向上

地域社会の担い手としての社会参画意識が向上し、豊かな心の醸成に寄与しつつある。

○地域連携の窓口の強化

職員の地域参画力が向上し、副校長・教頭がすべての情報を担うのではなく、職員が自主的に地域のよさを共有し、進んで活動するようになっている。

５ 今後の課題

●校区（白石町・大町町・江北町）ごとの実践

中学校区ごとの地域連携を強化し、地域全体で共有・実践する取組が求められる。